

巻 頭 言

北海道脳神経疾患研究所医誌20周年を記念して

財団法人北海道脳神経疾患研究所 理事長 中 村 博 彦

北海道脳神経疾患研究所医誌(脳研医誌)第20巻を刊行し、無事発刊20周年を迎えることが出来ました。関係者をはじめ常日頃よりご支援をいただいている皆様方のご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。最近は発行がやや遅れ気味です。次年度からは活を入れて編集に取り組みたいと考えています。また、脳神経外科学会指導医の論文は査読のない雑誌では不可とのことですので、正式に査読委員会をお願いして次年度より脳神経外科学会に認定される雑誌にする予定です。

今年は記念すべき第20巻ですので、阿部弘北海道大学脳神経外科名誉教授に「北海道の脳神経外科の歴史」を、千葉療護センターの岡信男先生に自動車事故対策機構(NASVA)の療護病床の現状と診療実績についての原稿をお願いいたしました。阿部弘先生の力作は、私が会長を務めた第11回日本病院脳神経外科学会での特別講演の一部をまとめたものです。次回には続編その2として旭川医大や大学以外の病院についてご紹介していただく予定になっています。阿部先生の原稿を拝読いたしますと、私の父の若かりし写真など大変懐かしく感じると同時に、先輩の先生方がいかに高い志を持って脳神経外科の研鑽に努めたかが伝わり頭が下がります。また、同門の先輩後輩の強い結束力が感じられ、両大学ともに先輩から後輩に技術はもちろん志が受け継がれている様子が伝わります。北海道の脳

神経外科の歴史をまとめた文献としては唯一だと思いますので、貴重な原稿として末永く保存させていただきます。

医局の存在が必ずしも肯定されない時代ではありますが、私にとりましても頼りになる先輩は本当に有り難く中村記念病院を運営する上でも大変お世話になりました。その中でも特に恩師と呼べる方は、前東京女子医大学長の高倉公朋先生、前都立広尾病院長の設楽信行先生、東大名誉教授の佐野圭司先生の三人です。

高倉先生には大学時代に私が医局長としてお仕えし、脳神経外科学会や医局の運営などたくさんのお話を学ばせていただきました。中村記念病院にとりましても、ガンマナイフ早期導入にご尽力いただき、東京大学とともに1993年にガンマナイフの高度先進医療として特定承認医療機関に選んでいただきました。特定承認医療機関は当時民間病院など全く縁のない時代で、当院が民間での第一号病院です。特定承認医療機関は経済的にも優遇されていて、当院の規模で年に一億数千万以上の利益が上乗せされ、2004年の診療報酬改定までの11年間に多額の恩恵を当院が得ることが出来ました。

設楽信行先生は私の最初のオーベンです。卒業後直ぐに脳神経外科医局に入りましたが、なじみないので辞めて他科に移ろうかなどと考えていた時に、脳神経外科を続けるきっかけを与えていただきました。私生活でも田舎者で知り

合いのいない東京生活を何とかと助けていただきましたし、卒後4年目に私をアメリカのNIHに呼んで下さいました。また、脳神経外科の医局長にも推薦していただき、アメリカでの2年半の生活と東大の医局長時代の経験が今日の自分に大変役立っていることを常に実感しています。

佐野圭司先生は私が脳神経外科入局時の教授です。佐野先生の教室員であることを常に誇りに思い、かれこれ30年以上脳神経外科医を続けてまいりました。中村記念病院に養子で行くことが決まった時には、佐野先生から「研究もやっている良い病院だから」と褒めていただきました。平成19年12月に北海道で唯一の療護施設機能委託病床 (NASVA病床) に当院が指定されましたが、事前審査にいらした課長には浴槽などの設備のことで厳しい指摘を受けました。入札とは名ばかりで前もってどこかの病院に内々に決まっていたのでしょうか、応募書類に目を通すと選考委員長に佐野圭司先生の名前があり、絶対に負けられないと思い頑張りました。課長がヒアリングの最後にどうしてNASVA病床に応募したのかと聞くので、「北海道で脳神経外科と言えば中村記念病院で、まして選考委員長が恩師の佐野圭司先生であれば応募しないわけにはいかないし、そもそも北海道で当院以外に相応しい病院がありますか。」と答えました。この言葉が効いたのか最終的に当院以外に応募病院はなく、選考委員満場一致で決まったとのこと。

後にNASVAの理事長に話を伺いますと、NASVAから佐野先生に療護センター設立の話をしたところ、当時の東大には重度意識障害の治療に関心のある脳神経外科医がいなかったため、佐野先生が東大では難しいと考え千葉大学にお願いしたとのことだそうです。佐野先生の思い

が三十余年かけてやっと札幌の地で後輩に伝わったのかなと勝手に想像していますが、佐野先生の当時の判断はやはり賢明でした。本号で岡信男先生に療護センターの現状と実績を書いていただきましたが、岡先生方のご尽力でこの事業が発展して日本全国に療護センターと委託病床が誕生し、交通事故で発生した多数の重度意識障害患者が救われているからです。もちろん、この事業の発展には東北大学の鈴木二郎先生や岡山大学の西本詮先生など脳神経外科の錚々たる諸先輩方が御尽力されており、改めて歴史の重みを感じている次第です。

最後に、私個人のことで大変恐縮ですが第5回齋藤眞賞を地域功労賞の部門で受賞することになりました。私自身は賞など全く眼中になく、病院の経営を立て直し一流の病院にするという一心で頑張ってきただけのことで、諸先輩を差し置いて賞をいただくのは大変おこがましいことだと思っています。しかし、地域功労賞ですので、私個人というよりは先代の中村順一理事長や同門・病院の諸先生方の代表として賞を受け取ることには異論はないと思います。また、喜ばしいことに今回佐野圭司先生が齋藤眞賞の特別功労賞を受賞されました。私のような不肖の弟子と一緒に先生に大変失礼かと思いますが、不思議なめぐり合わせにただただ神様に感謝という心境です。佐野先生から教わった学問としての脳神経外科を、北海道の地で更に発展させて行きたいと考えています。慢心を戒め常に切磋琢磨して励みますので、皆様方には引き続きご支援ご協力の程を宜しくお願い申し上げます。

脳研医誌20周年ということで、例年よりは長めの巻頭言を書かせていただきました。